

# 目次

序章	二〇一五年 日本岐路	1
第一章	古代——外交のかがやき	7
1	古代の日朝関係	8
2	古代の日中関係——統一国家出現	20
3	中世東アジアの中の日本	48
第二章	近代——外交のつまづきと再生	59
1	「鎖国」から開国へ	60
2	東アジアへの進出——日清・日露戦争	74
3	植民地支配——韓国併合	91
4	中国侵略——対華二一カ条要求・満州事変・日中戦争	99
5	太平洋戦争——戦争責任・戦後責任をめぐって	115

6	戦後の時代 ——日米安保・日韓条約・沖繩返還・日中国交正常化——	147	129
7	冷戦後の時代——アジアの諸課題	147	129
第三章	グローバル時代へ——古代の交隣外交に学ぶ	165	165
1	大国中国とどう向き合うか——東シナ海問題を中心に	166	166
2	韓国・北朝鮮とどう向き合うか ——慰安婦・強制連行・核問題	192	192
3	ロシアとどう向き合うか	206	206
終章	新たな国際国家日本へ	211	211
	あとがき	237	237
	参考文献	239	239

序  
章

---

二〇一五年

日本の岐路

二〇一五年は、外交的に大変に重い年である。終戦七〇周年の年であり、また、日韓両国が国交正常化して五〇年になる。本来、日韓両国にとり記念すべき年のはずであるが、どうにも素直に喜べる雰囲気ではなさそうである。

今日、日本と朝鮮半島との関係は極めて悪く、とりわけ気になるのが日本の中に蔓延しつつある韓国への嫌悪感である。日本人にとり、嫌いな国ナンバーワンが韓国である。そしてたんに嫌いなだけではなく、蔑視の感情が見て取れる。書店に山と積まれた韓国蔑視の本、本。これでもか、これでもかと韓国の悪口がつづられている。

そして、中国との関係も悪い。しかし、中国に対しては嫌いではあっても、蔑視の感情はあまり見受けられない。日本人の多くは、大国化する中国に対して脅威を感じているが、蔑視感はなさそうだ。戦前は中国に対してもひどい言葉で表現し、優越感を感じている向きもあったが、さすがに今日では蔑視感はない。ところが韓国に対しては嫌悪感だけでなく蔑視感が常に付きまとう。そこに日本と韓国との関係の難しさがある。

長年、外交の世界に身を置き、韓国との関係改善に努めてきただけに、今日の状況は残念でならない。日本人の多くは、韓国がいつまでも歴史認識の問題を取り上げることとうんざりしている。怒ってもいる。「もう韓国などは相手にする必要がない」と言わんばかりの論調が目立っている。中国についても然りである。悪いのは中国だから、日中関係が上手くいかなくても仕方ない、とい

う考えが国民に支持されているように見受けられる。

まったく、隣国との関係は難しいものである。よく言われることだが、世界中を見渡しても、隣国との関係が一番難しい。ヨーロッパではフランスとドイツとの関係、アジアでもインドとパキスタンとの関係、中東ではイランとサウジアラビアとの関係など、各々、歴史的な背景があり、かつて戦った相手、あるいは今日、ライバル関係にあり、すんなりと協力するのが難しい相手である。

日本の場合は韓国および中国との関係が隣国関係として、常に難しい関係にある。しかし、隣国が嫌いだからと言って、相手にしないわけにはいかない。隣国であればこそ、安全保障の観点や経済の関係でも、好むと好まざるとにかかわらず大いに関係があり、これら隣国との間で一定の協力関係を築き上げていかないと常に無用の摩擦が生じるだけである。

「兵法三十六計に遠交近攻あり」——昔から近くの国との関係は難しく、遠くの国と連携し、近くの国を攻めるのが兵法だ、といったことも言われ、今日の世界でも、この兵法が成功するケースもあろう。しかし、二一世紀の世界ではこの戦法は王道ではなく、時代錯誤にすらなっている。二一世紀は、地域協力が時代のキーワードである。欧州ではヨーロッパ共同体が作り上げられている。これを可能にしたのは、歴史的なवादかまりを克服し、欧州統合にかけたドイツ、フランス両国のリーダーの決断と勇気だった。北米ではNAFTA(北米自由貿易協定)が経済活動の推進力となり、アメリカ、カナダ、メキシコの経済統合が進んでいる。

アジアでも、ASEAN(東南アジア諸国連合)が中核となり、アジアの経済統合が進められてきた。しかも、そのアジアは二一世紀の世界で成長の中心となり、ここでの協力関係の推進こそ、

アジアの発展の大きなチャンスとなっている。一九九七年に経済・通貨危機を経験したアジアは ASEAN+3、つまり ASEAN の一〇カ国と日本、中国、韓国の三カ国、計一三カ国での経済協力を推進してきた。そのなかで早くに先進国の仲間入りをした日本は、まさにアジアの地域協力を推進する中核となることが期待されてきたし、事実、日本は大きな役割を果たしてきた。アジア通貨危機を契機に作り上げられたチェンマイ・イニシャティブはアジアの通貨安定に重要な役割を果たしてきたが、その中心的役割を果たしたのは日本だった。

ASEAN は二〇一五年に ASEAN 統合を実現する。この ASEAN 諸国は日本、中国などと協力し、アジアの連携を強化し、地域協力を推進したいと強く願っている。

そこにきて、今日の状況である。

日本と中国および韓国との関係悪化は、アジアでの地域協力の推進を困難にしている。誰が悪いのか、答えは簡単ではない。今日の南シナ海における中国とベトナム、フィリピンの対立をみると、中国の大国化と横暴とも言える海洋進出が地域協力を困難にしている元凶だと言えよう。同様のことが東シナ海でも起きていて、やはり、中国が問題の核心だ、という側面は否定できない。

東アジア全体のことを考えると、中国の台頭をどのようにとらえるかが核心的な課題である。本書においても、この核心的な課題について、じっくりと考えていきたい。同時に、本書では、日本と中国、韓国との関係全般について、今日、なぜ、これだけ関係が悪化しているのか、その原因はどこにあるのかについて、歴史的な視点をもちながら考えていきたい。とりわけ日韓両国の相互不信、嫌悪感の根底には長い両国の関係が影響しているのは間違いなく、歴史的な関係について両国

がある程度共通の理解をもたないことには前に進まないと考えるからである。

このように書くと、また、歴史問題か、いつまでそんなことを言っているのだ、といった批判も聞かれそうだ。しかし、われわれ日本人がどの程度、日本と朝鮮半島との関係を理解しているかと言えば、はなはだ心もとないものがある。私自身、つい最近まで、日本と朝鮮半島との長い歴史的な関係について、極めて大雑把な知識しかなく、しかも、その知識すら、事実とは大いに違っていることがあり、研究を進めるうちに愕然とすることが多かった。そうした研究の一端をもつて大学で学生に問いかけると、彼らの知識も予想されたことであるが、極めて限られたものであった。

そこで、今後の日韓関係を展望し、さらに日本の東アジア外交を考えるうえで、今一度、きちんと日本と朝鮮半島や中国との関係を振り返り、正しく歴史を理解し、そのことを日本の若者に伝えるのが自分の果たし得るささやかな役割と考えた次第である。以下は、そうした試みである。所詮、歴史学について全くの素人であり、専門家から見れば読むに堪えない内容だと恥じ入るが、外交という視点に立ち、日本と朝鮮半島、そして中国との関係を見ていこうとする取り組みであり、ご寛恕願いたい。





第一章

古代  
—  
外交のかがやき

# 1 古代の日朝関係

## 白村江の戦い

さて、日本と朝鮮半島、および中国との古代からの外交関係を振り返ると、まず頭に浮かぶのが白村江の戦いである。

学校の歴史の教科書では「六六三年、白村江の戦い、日本は百濟復興の目的で派兵するも、唐・新羅連合軍に敗れ、敗走した」、とあるだけである。ここはひとつ派兵と敗戦に至る背景や事実関係をきちんと検証してみる必要がある。

「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」

万葉集に収められた額田王ぬかたのおおきみのこの歌は、六六一年（斉明天皇七年）、百濟復興のため斉明天皇の一行が北九州へと向かう途次、愛媛松山の港、熟田津に寄港した時のものである。潮の流れを待ち、いざ、出航せんとする高揚感の伝わってくる歌である。その後、一行は九州に到着、福岡の朝倉に本営を設けている。

天皇みずからが九州へ遠征し、朝鮮半島に渡る軍団の指揮を執る、並々ならぬ覚悟が見て取れる。この一行には中大兄皇子なかつのおおえのおうじ、大海人皇子おほあまのおうじに加えて、多くの皇族、豪族が加わっており、中大兄皇子の娘で大海人皇子の妃となった大田皇女おほたのひめみも同行、大伯海おおらのみ（岡山県）で大伯皇女が生まれている。あの悲劇の王子、大津皇子おほつのみこの姉君である。飛鳥から王朝がそのまま九州に大移動した感がある。

当時、倭王朝はようやく制度を整え、中央集権国家としての形を整備し始めたばかりの時代である。この時に、王朝そのものを危機に陥入れかねない九州遠征と軍団の朝鮮半島への派遣決定がなされる。その目的は、百済の復興救済のためであり、この目的完遂のため、数万もの大軍を出兵させ、四〇〇艘の船を朝鮮半島に送った。その事実だけでも驚異的である。相手は唐と新羅の連合軍、どうみても勝ち目のない戦いに違いない。なぜ、そういう無謀と思われる決定をヤマト王権は行ったのであろうか。

この決定を主導したのが中大兄皇子である。

日本書紀を通じて伝わってくる中大兄皇子のイメージは、中臣鎌足の助けをえて大化の改新を断行したヒーローである。この大化の改新については、六四五年、「蘇我一族が天皇を軽んじ、権力をほしいままにしよとした、中でも目に余った蘇我馬子、入鹿親子を中大兄皇子が倒し、律令制を推し進めた立派な事業」と高校時代に習った記憶がある。しかし、史実はそう簡単ではなさそうだ。日本書紀は七二〇年に完成しているが、当時の実力者である藤原不比等が編纂を指導したものである。藤原不比等は中臣鎌足の子であり、当然のことながら中大兄皇子と中臣鎌足の行動を正当化し、美化する傾向があっても不思議ではない。そこで天皇を蔑ろにする蘇我一族に対抗し、悪者の蘇我入鹿を倒し、天皇中心の立派な改新を成し遂げたのが中大兄皇子だということになる。

しかし、この日本書紀の記述でも、飛鳥板蓋宮において朝鮮三国が「調」を貢上する儀式があり、その儀式の日に皇極天皇の御前で中大兄皇子とその一派が乱入し、蘇我入鹿を惨殺する。その時、皇極天皇は驚愕し、「何をするのだ」と詰問したというから、宮廷内のクーデターだという構図が

垣間見られる。

この大化の改新をめぐることは、実態は権力闘争ではなかったのか、悪の権化のように描かれた蘇我入鹿は実は有能で、改革派だった、といった指摘が多くの学者から出されており、大化の改新の有無をめぐる、学界では大論争が繰り広げられてきた。ここではその歴史にこれ以上深入りすることはしないが、対外関係という側面にしぼって歴史的な事実関係を探り、検討を加えていくことにしたい。

さて、六六一年の九州遠征は百濟復興を目的としている。百濟復興のため、日本から朝鮮半島に大軍が派遣されるという事態であるが、この時期、朝鮮半島はどういった状況にあり、倭国といかなる関係があったのであろうか。

#### さらに古代へ 魏志倭人伝

このように考えていくと、六六一年の時代における朝鮮半島の状況と日本とのかかわりを正しく理解するには、どうしてもそれ以前の古くからの日本と朝鮮半島との関係や中国との関係を理解しておく必要が出てくる。そこでさらに古代へと足を踏み入れていくことにしたい。

古代の日本と中国、朝鮮半島とのかかわりを示す文書は極めて限られている。そのなかで最も有名なのが魏志倭人伝である。魏志倭人伝は三世紀、卑弥呼の時代に邪馬台国と魏王朝との間で三度の外交上のやり取りがあったと記録している。卑弥呼が魏の皇帝から「親魏倭王」に任命されている。卑弥呼が魏に朝貢するという関係ではあるが、絹織物や銅鏡一〇〇枚が贈られるなど魏が卑弥